

統社同・フロント60年 思い出の人々①

2022年はフロントの前身・統一社会主義同盟結成から60年を迎える。昨年の『先駆』1000号記念連載で同盟機関紙・誌の歴史を振り返ったが、「組織は人なり」という。新年号から統社同・フロントの人々に焦点をあて、どんな人たちが組織を支え、運動を展開してきたのか、全国各地の同盟組織で記憶に残る人々を掘り起こし、同志、友人、知人に協力を仰ぎながら記録として残しておきたい。著名な人、無名の人、同盟を通過した人、周辺で奮闘した人等々、題して「思い出の人々」。

(編集部)

統社同創世記の人びと

安藤 紀典

はじめに

フロント(社会主義同盟)の前身、統一社会主義同盟が結成されたのは1962年5月であった。結成総会は東京で開き、会場は2日が四谷の主婦会館、3日がお茶の水の雑誌会館であったと記憶している。それから60年。その間、組織

の歩みは幾多の屈折を経験したので、途中で同盟を離れた人も少なくなく、またその後も共に歩んだ同志で結成以来の人はほとんど亡くなった。その結果、今日まで同盟に残っているのは私と妻の二人だけになってしまった。複雑な思いである。これが最後の機会と思って、統社同・フロントの歴史のひと

こまとして、創成期の人びとの思い出を書き遺しておきたい。

片岡久明

街の過激な商店主

統一社会主義同盟・フロントの創成期に、職業が自営業であった人は珍しく、私が知る限り二人しかいない。一人はこれから話をしようという片岡久明で、千葉県松戸市で総合食料品店を営んでいた。もう一人は慶応大学出身のHが家業の不動産業を継いだ。過労のためにクモ膜下出血で若くして亡くなった。

自営業と呼ぶのが適切かどうか分からないが、他には仙台に清水宏幸という著名な開業医がおり、また同盟新潟のリー

た存在だった。

彼は時々の政治テーマで小集会をこまめに組織した。公会堂や神社の社務所に会場を借り、手造りのポスターを街中の電柱に張って宣伝した。講師として私も何度か招かれた。どういったテーマを取り上げたか詳細は覚えていないが、三里塚闘争、68

日「反対などは記憶している。松戸市を含む東葛地域の同志たちの会議は片岡の自宅で開いた。私は大抵泊めてもらって、

会議の後は鮮魚部で作った豪華な刺身を御馳走になった。私が貧乏暮らしなのを心配して、帰りには「お小遣い」もくれた。「これで本が買える」とどんなにありがたかったかしのれない。

晩年の彼は視力をほとんど失い、自宅での会議以外は活動することができなかつた。どんなに淋しかったことだろう。それでも最後まで同盟に尽してくれ

た。江川弘の仕事は競馬の予想屋だった。江川は新潟大学大学院で経済学を研究した知識人だが、競馬の予想をして生活費を稼いだ。朝早く調教場で馬の仕上がり具合を見て、その日の予想を立て競馬新聞に提供するというのが彼の一日の仕事だった。彼に聞いたところでは、こうすれば昼間の時間は活動に使えるので便利だということであった。

片岡久明とはじめて会ったのは、統一社会主義同盟の結成総会のときである。当時の共産党は「革命が平和的形態をとるか、暴力的形態をとるか」は敵の出方による」という立場をとっていた。これに対して統社同のリーダーたちは「平和革命の可能性」を強調していた。21歳の私が生

た。葬儀は街の商店会の人びとが中心になって営まれたが、われわれも参列して別れを告げた。今から10年以内のことなのに、正確に何年であったかを思い出せないのは申し訳ない。

大野昭之

マルクス主義を

叩きこんだ教師

小・中・高の教員で統社同に参加した人の数は大阪が圧倒的に多い。大教組委員長の大谷敏雄が山田六左衛門とともに統社同の代表委員に就いたくらいだから、教組の著名な幹部もかなり含まれていた。日教組中央で青年部長を務めた岩井貞雄もその一人であった。

それに比べれば、東京の場合は都教組の幹部が数人いたものの、現場の教員はわずかだった。教組の幹部で私が覚えているのは次の5人である(カッコ

意気にも「社会主義への平和的移行を追求するが、その過程でたとえば60年安保闘争時のように、暴力的衝突が起きる可能性を排除すべきでない」と発言した。片岡と前野良(構造改革派の政治学者)が賛成してくれた。長い付き合いなのに、片岡が何年生まれで、どういう動機で社会主義者になったのかは聞いていなかった。私は1940年(昭和15)生まれだが、片岡は私よりは3、4歳上だったと思う。

社会主義革新運動から統一社会主義同盟への移行の過程で、構造改革派の研究者たちは「現代社会主義研究会」を組織した。組織実態がどこまで整っていた

か疑問だが、たとえば安東仁兵衛が編集した、社革新の機関誌『新しい時代』(1961年11月創刊号)に彼らが登場するときはこの肩書を使った(のちの第二次『現代の理論』時代も同

片岡は新日本文学会の文学講座に出席する文学青年で(その講座の中でこの夫人と出会ったと聞いている)、現社研芸術部会を組織して、私のところにもこまめに研究会の案内はがきを送ってくれた(何枚かは今も残っている)。

片岡は「過激大好き」で、東大闘争でわれわれが左傾化したときも支持してくれたし、1970年の第9回大会、72年の組織再建以後も歩みをともした。一番目に彼を取り上げた理由もそこにある。

片岡の総合食料品店は今でいうスーパーマーケットの走りのようなもので、鮮魚部も備えていたので、地域の人々には喜ばれた。空港建設反対で勇名をばせた三里塚が同じ県内であったから、三里塚の野菜を店内で販売するなど、片岡は「過激派」の商店主として街でよく知られ

内は都教組の支部名)。内田宣人(墨田)大野昭之(文京)、小峰・田上(大田)、星川光義(八王子)。なかでも大野は自身の活動のほかに、教え子たちを同盟に導いたという点で特異な存在であった。

大野は「体験的教育運動論

——教育と闘いの30年」(『現代の理論』1975年8月、10月号)という記録を残している。

それによれば、旧制一高から東京大学に進み、農学部農業経済学科を1951年に卒業、教師として東京都文京区立第十中学校に赴任した。それから約20年間、青春時代をそこで過ごした。教組運動や原水禁運動に取り組みと同時に、教え子の卒業後も一緒に「読書会」を続けていた。

54年3月1日、焼津のマグロ漁船「第五福竜丸」がビキニ環礁で、アメリカの核実験により被爆した。3月14日、焼津港に

戻ってきた乗船員は原爆症と診断され、同船が積んできたマグロから強い放射能が検出された。そのことが16日の新聞夕刊で大きく報道されるや、日本中が大騒ぎとなった。その後9月23日に無線長・久保山愛吉が亡くなった。

「このような状況のなかで、私の学校ではKさんの発案で、福竜丸の乗組員に対するお見舞いのカンパがあつめられた。これは組合の指示などではなく、まったくの自発的なものであった。また学校の近くに住む一女性から申し出のあった、原水爆禁止署名に学校として全面的に協力した。

この運動を推進したのは地域の青年男女のグループであった。「日本の原水爆禁止運動は、(東京の)杉並の主婦からはじまったといわれているが、実際は文京区においてもこのよう

な、組織というより活動家グループが動きだして、全国至るところで芽をふいていたようである」

各地で署名活動が展開していくと、これを全国的に統一しようという要求が高まり、54年8月、原水爆禁止署名運動全国協議会が設立された。このもとで署名は日増しに増え、10月上旬には第一目標の1千万人を突破、12月には2千万人に達した。この間、10月中旬に開かれた全国協議会の世話人総会において広島からの提案で、「原爆10周年の明年8月6日を期して、原水爆禁止世界大会を日本で開催することが決められた。文京区で活動していた大野は、日本共産党文京地区委員として赴任した安東仁兵衛と出会い、それ以後彼と行動を共にした。

教え子との「読書会」については、最初に担任をもった教え子たちが54年に卒業した直後か

この現実——70年安保闘争の火点(三一新書、68年)、『沖繩土着と解放』(合同出版、69年)などを著す。(私が石田と直接関わったのはこの時までなので、以後は略す)。

『新島』の末尾に収められた「工作者の伝説」という論考に、こういう言葉が刻まれている。「軍事方針のあとで、一度失った工作者の伝説を求めて島に渡った。そして更に根源的な失望を得た私は、今、きわめて元気だ。哄笑しつつ迷走している。ときたま、捨て台詞を我が足跡に吐きすてる。『逃亡極めれば、自ずから逆攻となる乎』。62年7月の「日記」の一節だという。

それはちょうど統社同に参加した直後のことで、後で彼から聞いたところでは、「構造改革論は西欧・都市型の理論、それに対して自分は底辺土着派である。自分ないものを構造改革

ら始まったようである。最初は大井武正(のちに医師)と岩村政幸(のちに東京都職員)の二人が中心で、彼らが徐々に同級生を誘って最終的には10人ほどになった。読んだ本は社会学、歴史、文学など多岐にわたったが、エンゲルス『フエイエバツハ論』同『家族、私有財産および国家の起源』、毛沢東『実践論』『矛盾論』なども読んだ(私が編集責任者を務めた、大井武正追悼集「地を這う人・大井武正」に寄せられた読書会参加者の証言による)。

読書会のメンバーのなかから大野の誘いに応じて、大井と岩村、金子潔(のち都立高校教員)の3人が統社同に参加した。

私が大野と会うのは同盟東京の全体会議の席が多く、彼が度々司会をしていた。ところが、会議の途中で居眠りを始めるのが常であった。身長180センチ超、体重90キロという巨

論から学びたい」ということだった。

統社同での石田の活動は、機関誌『構造改革』への執筆が中心であった。筆名は「田村宏」で、その主なものは次のとおり。第17号(63年6月号)、「創価学会の政治進出を衝く」、都知事選挙において公明政治連盟の幹部が東電太郎候補を支持したことをめぐって、創価学会内の動向を分析したもの。彼はその頃から創価学会の末端会員へのインタビュー調査を始め、のちに『創価学会』をまとめた。

第18号(63年7月号)、「憲法・社会主義革命・社会党」。社会党の機関紙『社会新報』活動版63年5月3日号に掲載された無署名論文「日本の社会主義と護憲運動」について、朝日新聞が「社会主義憲法めざす 社会党はじめて公式に表明」という大見出しを立て、あたかも社会党が「ブルジョア憲法に代る社会主

漢だから、仮眠で身体を休めていたのだろうが、会議の参加者は「大丈夫か」と気が気でない。ところが、会議の進行上大事な局面になると、ぱっと眼をさまして議事を的確にさばいてみせた。話はちゃんと聞こえていたのか、とびつくりした。

60年代末、安東仁兵衛や池山重朗と私たちが対立し、同盟東京が事実上分裂したとき、安東と同世代の大野は同盟を離れた。

石田郁夫

工作者の伝説

石田郁夫(筆名)は1960

年代から約30年間、新日本文学会で活躍したルポライター(記録文学作家という方が、作品の資質に合っているかもしれない)だが、今日彼の名を記憶している人は少ないだろう。まして彼が統一社会主義同盟に参加

して除名される。62年、統一社会主義同盟の結成に参加。

新島での活動経験をもとに、『新島——工作者の伝説』(未来社、62年)でデビュー。『創価学会』(三一新書、65年)は当時としては画期的な調査報告だった。70年安保闘争の前後は主として沖繩に関心を注ぎ、『沖繩

義憲法をめざす闘争」にすぐにも取り組むかのような印象を与える記事を書いて、大きな波紋を呼んだ。これを機会に、安東仁兵衛（全国委員、編集責任者）・安藤紀典・村田恭雄（初代書記長）・田村宏の4人で表題のような討論をし、安東と田村がまとめた。

第20号（63年9月号）、「総評大会の検討」、この年の総評大会の評価をめぐって、大会を傍聴した田村、構造改革派労働運動論の第一人者柳田竜夫（本名＝棚橋泰助）、安東の3人による座談会。

少し時間が飛ぶが、68、69年の大学闘争時に石田は日大に深く関わった。比喩的にいえば、東大闘争に比べて日大闘争は圧倒的に底辺土着型であったから、石田がそれに引き寄せられたのも無理はない。彼は日大全学共闘会議と共に『強権に確執をかます志』（しらいら書房、69

年）をまとめている。「強権に確執をかます志」とは、石川啄木「時代閉塞の現状」のなかの有名な言葉である。

東大闘争の方針をめぐって安東仁兵衛らとわれわれが対立し、70年安保闘争に向けて社会主義学生戦線（フロント）の左傾化が始まった頃、石田は同盟を離れた。彼にしてみれば、「構造改革派が左傾化したのなら、学ぶことはもうない。それなら自分の素のままで聞えるから」と考えてのことだった、と間接的に聞いた。やがて彼は革共同中核派を支持するようになったと推測される。

それでも私は、山村工作隊の経験をもち、新島で伝説の工作者として活躍した石田が一度は同盟に籍を置いていたこと、そしてその記録文学はユニークで貴重なものであることを記録しておきたいと思う。

（この項続く）

先駆社発行の書籍案内

「原爆・原発」のない社会へ 原水禁運動の発生と展開

池山重朗 著 定価 1000円

「作品」で読む関東大震災——震災が私を変えた

安藤紀典 著

『国家独占資本主義』論争とその後——現代資本主義論の系譜——

原澤謹吾 著 定価 1000円

変革の主体としての社会

井汲卓一 著 定価 1000円

評伝 沖浦和光とその周辺

安藤紀典 著 定価 500円

申し込み・問い合わせは下記へ

先駆社

東京都千代田区神田神保町3-11 望月ビル3階

TEL 03 (3264) 2482 FAX 03 (3264) 2483

E-mail senku@bjg.so-net.ne.jp

統社同・フロント60年 思い出の人々②

統社同創世記の人びと(2)

安藤 紀典

佐藤昇

構造改革派最強の 論客、結成宣言起草

1962年5月2、3日の統一社会主義同盟結成総会で採択された「結成宣言」は、第1章「われわれの政治路線」、第2章「同盟の性格と任務」で構成されていた。この「結成宣言」の原案を起草したのは佐藤昇である。

彼の証言によれば、「(共産党)離党後、春日さん(後掲)は一時、四谷に事務所を設けておられた。この事務所には私もよく通った。当時、春日さんと

ともに参加した統一社会主義同盟の綱領も、私はたしかこの事務所で執筆した覚えがある」

「春日さんのこと」、「追悼 春日次郎」所収、1976年。

結成総会で「結成宣言」の大筋は承認されたが、いくつかの点で修正が必要であるという点になり、その書き直しを再び佐藤に委嘱した。これについても佐藤の証言が残されている。

結成総会直後、沖浦和光にあてた葉書(消印の日付は判読できない)の一節である。

「例の『政治路線と同盟の性格・任務』の書き直しの仕事が、私におしつけられ(？)、目下苦吟中です。何とかまとめてみる

つもりですが、改悪にならないければシアワセと思っています」

社会党内へも影響力

佐藤は構造改革派最強の論客で、その理論は共産党内の「日本帝国主义自立論にもとづく社会主義革命路線」の確立に影響を与えたほか、社会党内にも江田三郎を柱とする「構造改革派」が形成されるきっかけを与えた。その事情については、貴島正道「構造改革派 その過去と未来」(現代の理論社、1979年)に詳しい。

それによると、社会党内構造改革派を形成する核となったのは、貴島正道(社会党衆議院事務局長)、加藤宣幸(党教文部長、著名な代議士・加藤勘十の息子)、森永栄悦(労働部長)らであった。『思想』1957年8月

献が大きい(66年に長洲一二と交代)。とは言え、その編集の苦労は少なかつたと彼は回想している。第二次『現代の理論』の発刊15周年を記念して編集された『現代の理論 主要論文集』(1978年)に寄せた佐藤の

「雑然たる感想」によれば、「編集長として特別に創意を働かせた記憶はないし、苦労をなめた覚えもない。編集当事者としての心労という実感では、率直に言つて、一時期、『現代の理論』と併行して出されていた社会党江田派の機関誌『社会主義運動』や『現代社会主義』にまつわる記憶の方が私にとって生々しく切実である」

戦中・戦後と晩年

今日の『先駆』読者にとって佐藤昇は馴染みが薄いだらうから、略歴を紹介しておく。

1916年、東京都豊島区に生まれ、東京外国語学校(現東京外国語大学)英語科に入学。

在学中の39年、左翼学生R・S

(読書会)グループ、および唯物論研究会に関係して治安維持法違反で検挙され、懲役2年(執行猶予)の刑を受けた。その後、日刊工業新聞の記者時代の44年、ふたたび同法違反(反戦活動)で検挙されたが、敗戦により釈放された。

46年、日刊工業新聞から松本重治らの創刊した『東京民報』外信部記者に移る。48年、同社解散のため労働調査協議会へ。日本共産党の「50年分裂」時には国際派に属し、「久保田俊吾」という筆名で鋭い論評を発表して注目された。57年、ソ連政府系の新聞『イズベスチヤ』の東京特派員。

この頃から、民主主義と社会主義の関係、日本帝国主义自立論、新しい社会主義革命の路線としての構造改革論、前衛党組織論などを次々に発表して、構造改革派最強の論客とされた。

号に掲載された佐藤の「現段階における民主主義」という論文を読んで感銘を受けた彼らは、さっそく佐藤に会うこととした。

そこから佐藤との親密な関係が生まれ、ときには三日三晩、連続泊まり込みでレクチャーを受けるほどの入れ込みようであった。やがて彼らを中心に明確な形でグループが形成され、江田三郎が構造改革論を受け入れたことで、社会党の表舞台に登場することになる(その後の経過は省略)。

他方、統社同結成後の佐藤は組織活動に直接加わることは少なかったが、1964年に第二次『現代の理論』が創刊される(2月創刊号)と、5人の編集委員を代表して編集長を務めた貢

折角の機会だから個人的な思い出も書いておこう。私が第二次『現代の理論』の編集下働きをしている時代、安東仁兵衛の使いで佐藤の自宅をたびたび訪れた。その中でとくに忘れられないのは、佐藤がある出版社からの原稿料を小切手でもらったが、現代の理論社で現金化してもらえないかと夫人に依頼された。それを私が届けたことがある。

当時の佐藤はほとんど原稿料収入に頼っていたのだからと思うが、生活はなかなか苦しいように見受けられた。そのため、娘さんが父親に向かって、「物書きとチンドン屋は嫌いだ」と叫んだそうだ。ここでなぜ「チンドン屋」が出てくるのかは理解できなかったが、それを若僧の私などにも話す夫人の苦しい胸中を察して、言葉も出なかった。生活の安定ということでは、

1965年頃、静岡大学の原口清(日本近代史研究)と柴田高好(政治学)が佐藤を英語教師として迎えたいという話があったが(沖浦和光あて手紙、消印8月10日)、これは実現しなかった。その後、67年によく岐阜経済大学の助教の職を得ることができた。誰が推薦したのかは聞いていないが、70年には教授に昇格した。

晩年の佐藤は盛んに「社会民主主義」をすすめるようになってきた。別に社会民主主義が悪いわけではないが、構造改革論がそこに行き着いてしまうのは、私などには納得できなかった。亡くなったのは1993年である。

春日次郎

共産主義者の

栄光と悲哀

春日の共産党離党

統一社会主義同盟の前史は、

日本共産党員であった人びとにとつては、第8回党大会を目前にして、宮本顕治書記長ら主流派の「綱領草案」に反対した少数派中央委員の頭目、春日庄次郎の離党が始まる。

1955年の共産党第6回全国協議会（六全協）で組織の分裂状態を修復して以後、58年に第7回党大会を開催して新しい「綱領」を決定することになった。宮本主流派が提案した「党章草案」（綱領）に対して、春日は「綱領上の問題点——私の少数意見」という反対意見を提出した（『前掲』12月号に掲載）。大会では春日を含む代議員の3分の1以上が「党章草案」に反対したため、決定は持ち越された。

61年8月に第8回党大会が予定され、それに向けて綱領論争が再開された。春日は原案反対の立場をとり意見書を提出したが、大会準備がすすむにつれ、

少数意見の発表は大幅に制限され、大会代議員の選出にあたって原案批判者を組織的に排除する工事が強められた。これに抗議して春日は7月7日に「離党声明」を発表した。中央委員の山田六左衛門、西川彦義、亀山幸三、内藤知周、同候補の内野壮司、原全五がこれに同調して離党した（のちに統社同に結集したのは春日・山田・原の3人）。

共産党離党者たちは61年10月、「社会主義革新運動」を結成した。春日はその議長だった。ところが、この組織の性格と目標をめぐって侃々諤々、議論百出でさっぱり意見がまとまらないう。たまたま大阪の同志を中心に、構造改革論の基本に基づいて、性格も目標も明確な新組織、統一社会主義同盟の結成が準備された。春日も同意見であった。

統社同の推力は大阪で、同盟員数も圧倒的に多かった。代表員多数の感覚であった。春日が統社同のなかで重んじられなかったのは、結成の推進力が大阪であったという事情のほかに、同盟活動の中心を担った安東仁兵衛や大森誠人ら30代の人びとの感覚の差、いわば世代間ギャップがあったと思う。それは同盟を離れてからの春日の軌跡、とりわけ「共産主義者の総結集」論に舞い戻って、統一有志会、共産主義者総結集、共産主義労働党、労働者党を渡り歩いたことにも現れている。

④これは現代におけるマルクス主義・科学的社会主義理論の創造的發展にならない。いちいち説明しないが、春日の立論は、1960年11月に開かれた、81カ国共産党・労働者会議で決議された「声明」（「81カ国声明」と略称）に依拠していた。事実、論文のなかにはそれが引用されていた。われわれが日本共産党内にいた頃、構造改革論に対して志賀義雄などは、「81カ国声明の立場に違反する修正主義である」と盛んに批判したものだ。そういう歴史があるから、いまさら「81カ国声明」でもあるまい、というのが同盟

委員に山田六左衛門と東谷俊雄（大教組委員長）、書記長に村田恭雄が就任したが、いずれも大阪所属であった。全国委員には東京から春日と安東仁兵衛が入ったが、社会主義革新運動で議長であった春日にしてみれば、組織運営の要をはずれた「閑職」であったと言えよう。共産党時代に福島で彼に指導を受けた高木松太郎が全国委員になった他、「番頭さん」格の吉田峯夫が常に春日をフォローしていたが、春日人脈はきわめて少なかった。

一方、戦前の共産党への苛烈な弾圧にも屈しなかった経歴を

委員に山田六左衛門と東谷俊雄

「内外情勢」で対立
統社同の第2回大会が63年6月253日、愛知県蒲郡の教員宿舍で開かれた。全国委員会が提案した「最近の国際・国内情勢」の草案に、代議員から多くの批判が集中した。議論で出された意見をもとに、全国委員会およびそれが指名する協力メンバーによって書き直し、修正す

生かして、救援連絡センターの代表運営委員を務め、この分野ではフロントとの関係も修復されたと言える。
「嵐について」
戦後の共産党内の分派闘争については実感できない世代にとつて、やはり戦前の共産主義運動史における春日の功績の方が輝いて見えた。略歴を示せば次のとおりである。

1903年、大阪に生まれる。共同印刷の印刷工、博文館（共同印刷）の植字工を経て、24年、渡辺政之助の推薦によりソ連のクートペ（東洋勤労者共産主義大学）に留学。2年後に帰国し、日本共産党に入党。関西地方委員長。
28年、共産党に対する第一次大量弾圧の3・15事件で逮捕され、治安維持法違反により懲役10年。37年、非転向のまま満期釈放。直ちに「日本共産主義者団」を組織して団長になり、反

ることにした。

7月45日、全国委員会は新しい「国際・国内情勢」について討議した。『構造改革』第19号（63年8月号）によると、「国内情勢」は春日・高木・中島が、「国内情勢」は春日・高木・中島・小寺山・吉田が保留した。同号に春日は『平和』『社会主義』『人類』について」という少数意見を発表した。その骨子は次のとおり。

①草案は「人類的平和運動」を社会主義の理論に創造的に綜合する問題意識をもっているが、しかし、それは失敗している。われわれは、労働者階級とその社会主義のための闘争、社会主義世界体制を中心にした視角に立たねばならぬ。

②社会主義世界体制の成立とその強化・発展は世界革命の事業と理念を広汎な大衆の意識にのほせ、そのことによって独自の人類意識と運動をよびおこ

戦活動を開始。「嵐について」「民衆の声」を発売。38年、治安維持法違反で再逮捕され、無期刑。45年、敗戦により非転向のまま釈放される。

この中ではやはり「日本共産主義者団」が戦時下に独創的な反戦活動を展開して、歴史にその名を残している（『日本共産主義者団関係資料』同30周年記念刊行会編、1970年）。それに敬意を表して、東京都社会主義学生戦線（フロント）は、1969年3月創刊の政治理論誌に『嵐について』という名前を付けた。

統社同・フロント60年 思い出の人々③

大阪編(1)

小寺山康雄

統社同の激動期を 体現

執筆のスタンス

私は60年安保の年に小学校入学。社革を経た統社同の結成時(1962年)も小学生低学年だったから、まるで知らない話。最終的に小寺山康雄議長除名(69年)に至る統社同の激動期も知る由がない。学園闘争が高校にも波及した69年、物好きの同級生が買った「全学連各派」なる書籍をみんで回し読みした記憶はある。そこに社会主義学

丹羽 通晴

生戦線(フロント)の章もあって、主要拠点大学や役員名簿もない。ただ、上部団体に統一社会主義同盟の記載があり、議長・山田六左衛門、書記長・安東仁兵衛と記しているのを見て、(名前から)イメージだけが「なんとという爺さんの組織か」と思ったものである。

という次第で統社同人物列伝の大阪編を綴るのには年齢が足りなさすぎるのだが、統社同以来の古参メンバーに「山六さんや大森さんらとの交流はいかがでしたか?」と尋ねても「まるでなかった」とのこと。彼らとて当時は若手で、現場(職場)

の活動に四苦八苦していたらしく、親交もほとんどなく語るべきものがないと言う。幸いといっては何だが、主だった人たちは遺稿集があり、そのうち何人かは私も多少の付き合いもあつたので、執筆する羽目になった。だから、実体験による記憶ではなく、ほとんどが記録からの引用になることをまずはお断りさせていた。

大阪編ということになると、順番でいえば①山田六左衛門、②原全五、③大森誠人：という流れになるのだろうが、私が(旧)統社同の人たちのなかで最も親しく付き合い、よく酒を酌み交わし、学習会などの企画も共にしたのが小寺山さんだった。その他の人たちとも、小寺山さんを通じて知り合った事例

も多いので、まずは小寺山康雄なる人物から始めようと思う。ただ、この過程でときどきは脇道にそれることもあるかとは思ふ。

略歴

ここで記す略歴は、基本的に「小寺山康雄追想・遺稿集」激流に挿して「想うがままに」(2021年2月刊)の「小寺山康雄・経歴」によっている。執筆したのは三左子夫人。生誕は1940年4月18日。3歳のときに空襲の激しい神戸市を離れ、兵庫県龍野市に一家で疎開。

「幼稚園、小学校を経て中学2年までです。勉強ができてスポーツ万能で喧嘩もつよい(本人弁)ガキ大将としてならず」。54年、神戸市に戻り、「長田区大

橋中学に転校。すぐに頭角を現し生徒会長や野球部などにスカウトされる(本人弁)。実弟の小寺山巨氏も「学業成績は抜群、スポーツ万能でした」、「正義感が強く：容姿も性格も勝新太郎そっくりでした」と評している。勝新太郎によく似ているという評価は、その後も多くの人たちから聞いた。なお、龍野からの移住について本人から聞いたのは「あれは夜逃げではなかったかと思っている」とのことだった。

県立兵庫高校に入学し、生徒会や哲学研究会で活動するが、成績は徐々に悪化。60年「一浪して神戸大学入学。母の東大の夢破れる。入学前から自治会室にいりびたり安保闘争に邁進。すぐに共産党神大細胞に入党、母を泣かす」。ただし、この共産党入党も1年後には神大細胞そのものが除名処分となった。3年のときには兵庫県学連の委



員長になる。兵庫時代の先達だった中島秋生さんの遺稿集に、小寺山さんがこのあたりの経緯を書いている。「62年、5月統社同結成大会。兵庫からは直原、中島一憲、小寺山が全国委員。この頃神大は直原、一憲、OBらの陰謀で宮田らの指導部は追放される。ために、失恋になり深いダメージを受けていた小寺山が急遽、飲み屋から召還される」

この県学連委員長ときの副

委員長が山崎洋祐さん(関西学院大学)と眞砂卓三さん(神戸外語大学)で、彼らの友人関係は終生続いた。私自身も小寺山さんの学友たちとは何度か会う機会があつたが、なかでも山崎・眞砂両氏とは最もよく会った気がする。なお、ここにある「宮田」とは宮田剛さんのこと

で、60年安保当時は2年生で、全学自治会委員長だった。2019年秋に滋賀県で開いたフロント塾に来てもらう予定だった

が、体調不良で来ることかなわず、そのしばらく後に病没された。

1965年、神戸大を卒業。卒論は「一共産主義者の考察・春日庄次郎」なのだが、史学科の担当教官からは「こんなのは歴史の論文ではない」と却下されそうになるが、別の教官が「これで小寺山くんが大学を卒業してくれるのだから、よしとしようじゃないですか」と助け船を出してくれて卒業できたらしい。卒業前から自治労大阪府本部の書記に就職するが、やがて府本部書記の職を大森誠人さんに譲って、本人は府職労の書記となる。

私は、府職労書記だったことは本人から聞いていたが、自治労書記のことは大森誠人遺稿集を見直してはじめて知った。そして、この当時はたぶん統社同の組織方針だったのか、社青同にも加入するが、これも後に除

名されることになる。よく呑みの席で「除名されたのは共産党、統社同の2回やない。社青同も入れて3回や」と聞かされていたが、これは小寺山さんの自慢話(?)の一つではあった。

67年に神大で同級生だった三左子さんとベトナム反戦運動で再会してやがて結婚。在学当時は「ゴリゴリの活動家で大人びて見える彼は遠く煙たい存在でした」と三左子さんは回想する。結婚式では、密かにいつ別れるか賭けが行われたそうで、しかも統社同の全国委員会が大阪で行われた時期だったから、式には山六、安東仁兵衛、沖浦和光といった錚々たるメンバーも列席したそうである。68年「統社同専従となり、職業革命家として生きる」と宣言。革命的ヒモを自称

統社同との決別

69年「70年安保闘争の過激化

が設立され、彼は専従の「事務局次長に就任。給料の出る仕事に就く。：センターの11年間は彼の人脈を培い、頭でっかちな思考をより柔軟で奥行きのあるものにした。一番生き生きとして向いていた場であった」

しかし、その「向いていた場」にも10年そこそこしかいなかった。88年、46歳のとき「周りの反対を押し切って『社会主義連合』結成に向けて活動するため理論センター専従を辞任」。この行動は私などにも無謀かつ勿体ないと感じた。「もう少し社会党、総評サイドとの窓口の役割を果たして欲しい」と思ったものだが、小寺山さん側にもそうはいかない事情があったようだ。この当時から連合を志向する組合に対して公然と批判的な立場を堅持していたから、理論センターの有力単産だった全電通や教組・自治労などからは小寺山批判が出はじめていたと本

のなかでフロントと統社同労働運動派との亀裂ができ折衷案として議長を押し付けられ苦慮する。おまけに隠れるといわれ友人宅や教官宅を転々。ついに袂を分かつ。時代の変化を受けて統社同も激動期を迎え、ついには「小寺山議長除名」へと進む。そのあたりの事情は小寺山遺稿集に安藤紀典さんが書いてるので、そこから略述する。

ちなみに、この両名は同じ年で統社同結成に参加し、ともに学生委員になった。60年代後半に同盟内論争が激しくなり、69年5月の第7回大会で大森(第二代書記長)、安東(第三代書記長)らの指導部が辞任する。論争は全共闘運動の評価(とくに東大闘争での安田講堂籠城の是非)、ベトナム反戦闘争における対立が発端となる。小寺山さんは相対的に左派に位置していて、新指導部を支持していた安藤さんも、旧指導部層だった大

人からは聞いた。

職業革命家を志望する

革命家を志向し、職革たらんと欲した経緯については、大森誠人遺稿集に本人が書いている。「この世にショッカクなる崇高な職業というか、仕事があることを知ったのは」中学3年の頃らしい。高校3年のときには神戸・元町の共産党兵庫県委員会の事務所に向いてその夢を滔々と語り、素気無く追い返される。大学卒業を前にいよいよ本気になり、兵庫の直原さん

森さんや安東さんも小寺山さんに新議長就任を説得した。

このあたりの事情は本人によれば「クーデター派は学生に毛が生えた程度の年齢ということもあって、アンジンを追いついたあとの組織運営に自信がなかったのだろう。かれらより少し年長のわたしを議長に据えようとした。また、アンジンや大森誠人ら東西の『おとな』たちも、ここまできたら統社同を壊滅させるわけにはいかないというので、渋るわたしをむりやり議長に就かせようとした」(『現代の理論』デジタル版15年秋号) 同年8月の第8回大会で小寺山議長、高田麦書記長の新指導部が成立するが、まもなく秋のベトナム反戦・70年安保闘争の戦術をめぐる意見が対立し、ついに11月に除名問題にまで発展した。根底には「構造改革論」を全否定する指導部多数派との対立があり、安藤さんは多数派

や山六御大に話しても無駄だろうと踏んで、大阪の統社同事務所に単身乗り込み、大森誠人さんに直談判を仕掛ける。「革命運動の本隊である労働運動をやりたい。できることなら戦前からの伝統に輝く金属が志望だ。共産党のセクト主義を排し、腐敗する民間からヘゲモニーを奪還せねばならない」との格調高い力説に、大森さんは「自治労府本部の書記にアキがある」とのみ一言。

かくして争議で勇名を馳せた民間中小労組オルグへの道は断

を支持していて、小寺山さんには「一旦(議長を)辞任して、時期を待つように」と諭したが、当然のように小寺山さんは拒否。三度目の除名が決定した。

この除名問題について小寺山さんと話をした記憶はあまりないが、晩年近くに言っていたのは武装問題だった。新指導部多数派が「権力と対抗するのに武装する必要がある」と力説するので「どこまでやるのか」と問うと、「重火器まではいらないが、軽火器はどうしても必要だ」と言う。「そんな漫画チックな議論やった」と自嘲気味に語っていた。いまから思えばたしかに漫画のような話だが、あの当時はそれなりに真剣な議論だったのだろう。

統社同を離脱した小寺山さんは統一労働者同盟(統労同)準備会を立ち上げるが、結局は準備会のまま終わる。そして、77年に社会主義理論政策センター

たれ、公務員労組の書記となる。ただ、それも数年後には辞めて、統社同の専従となり、やがて激動期に突入する。だから定職にあったのは自治労系と理論センターの14年ほどではなかったか。それ以外の期間を職業革命家というのか、革命的ヒモと称するのか、それは私などが論評することではないし、本人に直に聞いたこともない。ただいつの場面でも豪放磊落だったことは確かで、人生そのものを楽しく謳歌していたと思う。

楽しみといえば、小寺山さんにとってはイタリア旅行が最高の楽しみだったのではないか。三左子夫人の長期休暇に合わせて毎夏のように出かけ、たいいていヴェネツィアを起点にフィレンツェやローマなどにも行っていた。友人・知人を誘って旅することも多かった。理論センターの関係で中国への視察旅行



をしたこと、両家の親を連れてスペイン旅行をしたことも聞いたことがあるが、北方のゲルマン系へは行ったことがないと思う。観光を楽しむというより、イタリアの風土や人びとの暮らしを楽しんでいたようだ。そのあたりはグラムシ最良もあつたのだろうか。

統社同除名の直後頃、彼は教員の仲間に頼まれて2度ほど短期の臨時講師をしたことがある。1度目は西成の鶴見橋中学、2度目は市岡定時制高校。この市岡定時制高校には社研があつて、全日制高校の部落研や解放研などと交流関係があつた。ちようど狭山差別裁判闘争が全国化していた頃で、高校を中退していた私も彼らと交流があつたが、小寺山さんの教え子(?)という認識はなかつた。そのうちの一人とはいまでも集会などでよく会う。

貧しい学生生活を送り、党派

専従の貧しさを熟知していたからか、学生や専従者を見れば酒の席に誘い、必ず奢っていた。理論センターの専従を辞めてからは定期的にカンパを送つてくれる奇特な人たちも多かったよ。三子さんが「カンパをもらっているのに」となじると「しょぼくれた俺なんか誰も喜ばん。小寺山は小寺山のままでもいいねん」と言うのが口癖だったらしい。

個人的な付き合い などなど……

小寺山さんとの初対面は79年のこと、春か夏頃だったと思う。社会主義理論政策センターの専従となつて2年目。大阪でも狼狽さで一、二を争う阪急東通商店街の、ちようどアーケードが切れた四つ角にある散髪屋の2階にある事務所を訪ねた。当方は大学を卒業したものの就職もせず、フリーターのような

生活をしてきた。フロントの先輩諸氏から「小寺山との和解はなつた」と聞いていたからか、理論センターの活動に興味を抱いたからなのか、いまとなつては訪問動機も判然とはしない。話の流れで「戦前戦後の労働運動、社会運動に関心がある」と言ったら、「旧友クラブ」という会を紹介された。

これは、戦前の共産党3・15弾圧事件の当事者だった高田鉦三さんが主宰する、月一の昔語りのお会合であつた。戦後直後世代の脇田憲一さん(枚方事件の未成年被告)を事務局長格に大阪労働運動史研究会へと改組した頃で、話をテープ起こしして手作りの機関誌に掲載するなど始めていた。これには実務的に多少の貢献はできたかとは思。理論センターの月一の例会にはそれほど熱心ではなかつたが、その部会の一つである朝鮮問題研究会はきちんと出席し、

吹田・枚方事件や共産党組対の活動実態、阪神教育事件のことなどを詳しく聞くことができた。

知り合つてほどなくの頃、「山六の偲ぶ会をするから手伝つてくれ」と言われた。遺稿集の作成も手伝つたが、たいしたことはしていない。理論センターの「〇周年の集い」もよくあつたが、受付やあちこちにマイクを運ぶくらいのこと。理論センター以外にも大森誠人さんの慰労会や原全五さんの出版記念会、安東仁兵衛さんの古希の会や偲ぶ会などもあつたが、いずれも呑みを伴う会合ばかり。神戸大学時代の恩師の「退官記念の会」などにも駆り出された。理論センターの事務所夕方頃顔を出して、「一杯行くか」と問われて「いいですね」という機会も多かった。その際は必ず奢つてくれた。私は党派専従ではなかつたが、貧しいことでは

似たり寄つたりだから、有難い話ではあつた。そういえば、彼は酒と煙草をこよなく愛する人で、その点でも気があつたのかもしれない。

理論センターの専従を降りて、それでもその近くに事務所を借りて「コミュニケーションセンター・ポポロ」と命名した。90年代の頃は、そこをベースによく国際連帯にかかわる学習会などをよくやつた。その多くは小寺山さんが発案し、われわれが手助けするパターンで、何人かの党派活動家や無党派メンバーも寄り集まる会合だった。アジア太平洋資料センター(PARC)と話をつけたのか、「パルク関西センター」を名乗つて事務所にも勝手にその名を掲げた。このあたりは「お山の大将」だった感じがする。

世紀の変わり目頃に関西先駆社もポポロに同居するようになる。そこは相互に財政的事情が

あつた。忘年会や新年会も事務所でする機会が増え、その場で「これだけのメンバーがいるのだから、不定期でもいいから学習会などをはじめればいいのか」という話になり、2、3カ月に1回のペースで学習会を重ねていった。講師やチューターに関して、小寺山人脈が大いに役立つ。少額の講師料でも相応の人たちが来てくれたし、とくに親しい人には「終わつてからの呑み代が講師料」という手もよく使つた。

小寺山さんとの付き合いはそのときどきで濃淡はあつたが40年以上にも及ぶ。語るべきエピソードもまだまだあるが、それを言えばキリがないので、そろそろ幕にしよう。

『先駆』2月号を読んで

「東日本大震災から11年」がタイトルの森田氏による女川原発再稼働問題レポート、『先駆』編集部「脱原発情報」は原発問題の各側面を抉り出していた。2月8日、台湾政府から福島県と関東四県の食品輸入規制緩和の案が発表された。多くの国で放射能汚染対策による日本の食品輸入規制が継続されている。福島原発事故は、日本の農林水産業者を今も苦しめている。

小林氏の「岸田首相論考」『新しい資本主義』を読む、前川氏の「グリーンニューディールとは」、津田氏の書評(有馬純著)「亡国の環境原理主義」は日本の経済・環境政策の課題を明らかにしている。

ルーズベルトの第一次ニューディールで若年男性の失業対策として市民保全部隊制度がつけられ、10年間で200万人が植

林、河川の汚染除去、動物保護区などの環境保全をやつたことは知らなかつた。記憶に留めるべき政策だ。

経済・環境政策の大事な柱が農林水産業である。岸田首相は地方再生として「デジタル田園都市」を掲げたが、根本の農林水産業の視点は完全に欠落。今後、先駆誌上でこの分野の議論を深めていきたい。

『先駆』は、安藤氏をはじめとして社会運動の歴史論文が充実している。現在の社会運動の方向を考える上で重要である。2月号から歴史論文に宗氏の連載が加わり厚みが増した。今後に期待したい。

中村氏の「労災奮闘記」は身につまされる報告だった。先駆の読者の多くは、職場や地域の仲間をサポートするため日々奔走している。先駆に掲載される現場報告や論文は、実践で役立つ、わたしたちを励ましてくれる。感謝したい。(島)

大阪編(2)

丹羽 通晴

山田六左衛門

統一社会主義同盟

初代議長

戦前からの共産党員にして大衆運動の闘士

統一社会主義同盟(統社同)

結成時に共同代表に推戴され、その後は初代議長として勇名を馳せたが、知人たちからは「山六」「六さん」と慕われ続けた人物。

まず『社会運動人名辞典』(塩田庄兵衛編、1979年、青木書店)から略歴を拾ってみる。01年、鹿児島県熊毛郡南種子村

(現・南種子町)字平山に自作農の次男として生まれた。県立一中でロシア革命の影響を受けて学友たちと漫遊団を結成。ロシア文学に関心を寄せ、早稲田高等学院政経科では農文学に傾倒して中退。徴兵延期の狙いで日本大学専門部宗教科に在籍したが、1日も登校せずプロレタリア文学への関心を深めた。

26年、医師の姉夫婦を頼って大阪に移り、27年に泉南郡の寺田紡績計量係となるが、1年もたらずに評議会の泉州紡績労働組合の解雇反対闘争で臍首、そのまま自宅を同労組津田支部事務所にあてる。やがて組合の常任委員となり、共産党入党、

い連中が頑張ってるな」と語り「本部役員(統社同籍の人が多かったと思われる)が渋い顔で聞いていた」といったエピソードを何度か聞かされた。小寺山康雄さんに懇話会と遺稿集作りへの協力を頼まれたのが、ある意味で最初の出会い。といっても、獄中(堺刑務所)から雪子夫人に宛てた葉書を書き写したことで、統社同時代を懐古する座談会に同席してテープ起こしをしたことくらい。ただし、獄中からの葉書は割愛されたし、座談会も小寺山さんが

労働農民党にも加わった。28年、岸和田紡績争議を指導、315事件で検挙されるが、共産党入党を秘匿して控訴審で懲役2年、執行猶予5年の判決を受ける。30年、岸紡争議の指導過程で全協組織結成に尽力する。

31年の大阪府会議員選挙では、全協大阪支部協議会キャップ・全協金属大阪支部委員長として、共産党中央の意向に背いて小岩井浄さんの推薦を決定(結果は当選)。32年、上京して全協中央常任委員となるが、第1回中央委員会で天皇制打倒の行動綱領に反対して中央常任委員を辞任。33年に再び検挙されて懲役6年を科され、40年に出獄。

敗戦後は共産党中央委員・大阪府委員長、61年夏、春日庄次

郎らとともに除名され、統一社会主義同盟を結成した。この略歴はどうやら山六さん自身があるらしい。若い頃の逸話については、同郷の後輩だった原全五さんが、山六さんの旧友たちを訪ねたりして回想している。文武ともにトップクラスで、高等小学校の頃には女子生徒全員にラブレターを送るほどのマセガキだったようだ。鹿児島島の県立一中時代、松井須磨子の歌を聞いて「頭が左に傾いた」らしい。

大衆運動に軸心を置き、権威主義に歯向かうスタイルは、戦前の小岩井選挙での独自推薦や労働組合への天皇制打倒方針の押し付けに反対した姿勢にもうかがえるが、戦後も食糧危機突

破民主連盟などの大衆活動に進み、財政的にも共産党から自由でいた。徳田球一・志田重男といった党幹部に和歌山に飛ばされたときも、私鉄の党フラクで生き生きと組合指導を満喫していた。

遺稿集『濁流を悠々と』

私自身は、山六さんとは面識がないが、先輩方から「大阪のメーデーでは社共と並んで統社同も来賓と呼ばれ、山六が演説をしていた」とか、市職反戦の集会・デモを見て市職本部で「若



1959年、参議院大阪地方区に立候補

司会を務めていたからテープ起こしをするまでもなかった気がする。にもかかわらず、8人の編集者の末尾に名前が列記されていることは遺稿集を再読してはじめて知った。

この遺稿集『濁流を悠々と』山田六左衛門とその時代(山六会、1981年刊)は、418ページにもなる大著で、幼少から青年期、戦後の活動歴、315事件の尋問調査ほか、「平和と社会主義」に掲載された執筆文書、交遊のあった37人の思い出話などからなっている。回顧座談会は、戦前の全協(全国労働組合協議会)時代、戦後の共産党時代から離党まで、統社同時代の3編からなる。先述した原さんの回顧も、この遺稿集に記されたものである。

ところで、遺稿集は山六3周忌が発行日となっている。この頃の印刷物はほとんどが写植になっ

小寺山さんもそのつもりだったが、たぶん原さんたち年配層から「写植では軽すぎる。やはり活版印刷でやるべきだ」と言われ、どういふ伝手で選んだのかは知らないが、台湾に安くて頼める印刷業者がいるということ

で、方針変更を余儀なくされた、ということ聞いた記憶がある。出版が3周忌まで延びたのはそういう事情があったようだ。ちなみに、山六会とは、山六さんの古希の会を開いたり、懐旧談を聞いたりするために結成された無定形の任意団体。山六さんの小遣い銭を集めようという意図もあった模様。ある人の回顧に山六会の会費を毎月送っていた奥さんから「山六会はどうなるの」と問い詰められた話が載っているから、律儀に会費を送り続けていた人もいたようである。

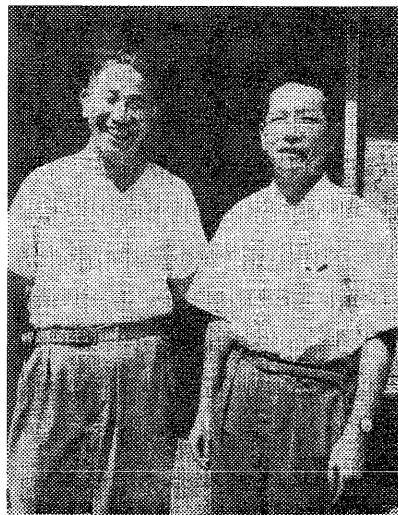
遺稿集が出たからだったか、一周忌だからかよく覚えていな

ども記載されている。

統社同時代の 山六さんのスタンス

戦前、戦後直後まで話を広げるとキリがないので、統社同時代に限って話を進める。主なネタ元は遺稿集の座談会・統社同編。司会は小寺山さんで、参加者は安東仁兵衛、安藤紀典、大森誠人、原全五、松葉武雄、村田恭雄（紙上参加）の各氏。

共産党を離党した7人の中央委員・中央委員候補を軸に社会主義革新運動ができたのが61年11月頃で、62年5月には社革から別れたメンバーで統社同が結成される。7人のうち統社同に来たのは、春日庄次郎、山六、原の3人のみ。離党・社革結成のときから波乱含みだったわけだが、結局は社革の第3



1958年、共産党第7回大会の直後、盟友の西川知義さん（右）と

回全国委員会（62年2月）で上記3人は役職を降りて西川彦義さんが社革の議長になる。結成された統社同では議長は置かず、山六と東谷敏雄さん（大教組委員長）が代表委員になった。これは当時「無党派活動家の結集」という大目標があったためと、運動的に大阪が先行していたせいかと思われる。60歳そこそこだった山六さんは、安東さんや大森さんへの信頼が厚く、すべてを若い者に任せるといふ態度だったよう

だ。映画『仁義なき戦い』に例えていえば「神輿を担ぐ人、神輿に乗る人」のバランス感覚があったようにも思われる。64年に共産党を離党した志賀義雄さんたちが「大同団結論」を提唱して春日、原の両氏が統社同から離れ、山六さん1人が残る。大同団結には山六さんも反対だったが、若い頃から冗談半分にせよ「わが師春日」と呼んでいたのだから、この別れは深刻だった。ただ、これら古い人たちの交遊関係はずっと継続して、「オールド・ポリシェヴィキ会議」なる会合もあったようである。

60年代後半、全共闘や反戦青年委員会の行動が活発化し、さらに先鋭化していくと、それまでは若いといわれた安東、大森といった面々も組織から離れていくようになる。小寺山さんによれば「みんながやめたとき、山六はだれにも相談を受けてい

いが、京都・宇治の山六邸を訪問したことがある。それも、統社同を除名された小寺山さんらと、当時のフロント関西のリーダーたちが連れだつて出かけた（10人もいなかったと思う）、なぜか私も同行した。瀟洒な造りのお宅だった記憶があるが、そこは雪子夫人の上林家、江戸時代から続く宇治茶専門の名家だったのではないか。山六さんはそこに泰然と居候を決め込んでいたようだ。しかも、そのお嬢さんに一目惚れし、非合法潜伏中にもかかわらず結婚式を挙げて入籍し、新婚旅行までしたというのである。彼女自身も、日本髪や振袖の袂にピラを隠して連絡係を務めた活動家でもあったようだ。そういうえば刑務所から何通もの葉書や手紙を出していたし、旅行先からも手紙を送付していたことが知人たちの回顧談にある。友人たちには「雪子姫」と呼んでノロケた話がないんですよ。だから、そのころの山六はだれも相談相手がなくて困っていたようでした」とはいえ、その後のフロント（日本共産主義革命党）も何度か政治集會に彼を呼んでいるし、小寺山さんの統労同（準）事務所にもよく顔を出していたという。それ以前からも威勢がよくて元氣が出る話をする山六は地方組織からも評判が高かった。

原さんの回想でも、社会党なども交えた共闘組織の會議などで「おれの下には若いものがない」と山六がほめかしたり、「世間を騒がせているそのなかの一部分がおれの下にはいるんだ」という自負心があったという。

「金十満両借用仕る」

統社同結成時、大阪・高垣町（現在の堂山町あたり）の事務所には山六、原、大森、松葉、佐々木弘、堀口宏二と常任が6人も

いた。組織人員に不釣り合いなほど人がいたわけで、各人の生活費も必要だから、それを山六さんに「頼む」となる。そうすると左翼関係はもとより左翼と関係のないところまで出かけて、「金十満両借用仕る」と言ってもらってくる。大森さんが「金がなくなつた」と言うと、「あそこはつい行ったばかりやし」とか「ここは今はないし」と覚えていて、「わしが行つたらあかんけど、お前行け」と言われたところもあるらしい。茫洋なようであり、実に細やかな肌合いでもあったようだ。

お金の借用のエピソードは組織的なものだけではない。ある人の回想に「お前いくら持ってるか」と聞かれ、「家内を買った物を頼まれて2万円預かってい」と答えると、「それをオレによこせ」と言う。どうやら東京行き費用らしい。仕方なく渡すと中央委員の肩書がついた名

刺に「金2万円借用す」と書いて、年月日まで記したものを返されたという。それほど傍若無人なのに、奥さんが電話口に出ると丁寧なもので、その鮮やかな手口に驚かされたという。

これほどの活動歴がある山六さんだから、共産主義者だったことは間違いないが、あるとき小寺山さんが「六さんはマルクス、レーニンの本を読まれたことはありますか」と聞いたら「読まなかつたよ」との返事。「それじゃ何を読んでいたんですか」と聞くと「もっぱら蓮如が好きだった」と言う。この道に入ったのも「人間修養だ」とのこと。

そういうえば、獄中からの書簡も仏教関係の書籍を差し入れるといふのが多かったと記憶する。あの世代特有なのかも知れないが、山六さんはソ連好き、フルシチョフ好きでも知られていた。統社同が分解したとき、ソ

ソ友好親善協会を作るなど、

連への思いは強かつた。しかし、大森さんが「おれは入らんよ」と言うとお前みたいなものに入られちゃ困る」と答えた。「革命の祖国ソ連」という思いは最後まであったが、それを政治方針や組織の路線に結びつけることはなかつたという。現実のソ連の政治や体制と「革命の祖国ソ連」は、彼にとつては別物だったのかもしれない。

最後に、山六さんのホラ話で締めることにする。「薩摩藩三千石の家老の末裔」というホラを山六さんは吹き続け、それは古い統社同メンバーにはホラ話と了解していたが、すっかり信じ込んでいた人も多かつたらしい。山六遺稿集の回想で大阪総評議長だった帖佐義行さんは、同郷の自分自身と山六さんを「家老の子と貧しい漁師の子」という対比で素直に語っている。

統社同・フロント60年 思い出の人々 ⑤

大阪編 (3)

丹羽 通晴

原全五

ひたむきに可能性を求めて

3度の逮捕と7年の懲役刑

「種子島から来た男」

山六さんに続いては原全五さんになる。8回大会を前に共産党を離党した7人の中央委員・中央委員候補の1人で、さらに社革を離脱して統社同を結成したのは春日庄次郎、山田六左衛門、原全五の3人だけだった。親しい人たちからは「はらせん」「全さん」と呼ばれていた。ところで、原さんとは80年代頃に何度か会ったことがあるが、労働

者党あるいは大阪労働研の人という印象が強く、統社同のイメージはない。それには原さんならではの人生航路があつたようである。亡くなったのは2003年。

70年代中頃に三里塚闘争に連帯する会の事務局長だった人物（私より少し年長）から連絡があつて告別式には参列した。ただ、その後に偲ぶ会をしたかどうかはわからず、遺稿集についても知らない。ただ、手元に2冊の著作がある。「大阪の工場街から」私の労働運動史（柘植書房、81年）と「種子島から来

た男」一旋盤工の手記（ウニタ書舗、92年）で、前者のときは古稀の祝いを兼ねた出版記念の会がPLP会館で開かれ、私も参加した。前者は大阪の工場で働きはじめて労働運動や共産党活動に身を投じてから離党に至る軌跡、後者はさらに幼少の頃と共産党離党後の社革・統社同・共労党・労働者党へと至る足跡が綴られている。

工場群に残らず

赤旗が立つ

原さんは1912（明治45）年に種子島で生まれ、17歳で大阪に来てセルロイド工場や鉄工所で働きはじめ、やがて砲兵工廠で旋盤工になる。郷土の先輩である山六さんのオルグを受けて仲間3人で日本金属労働組合

大阪支部砲兵工廠分会を結成。

さらに共産党にも入党する。以来、33年、35年、38年と3度も検挙・投獄され、最終的に懲役7年の刑を宣告されて、1945年9月に刑期満了で堺の大阪刑務所を出獄。投獄されて釈放されるたびに故郷に帰り、百姓仕事をし海で泳いで英気を養い、再び大阪での活動を再開する。「木津川べりに立ち並んで姿勢よく煙をはいている、藤永田造船、名村造船、浪速ドック、アサノセメント、石川製鋳、大原造船等々を見て、あの工場群に残らず赤旗が立つことがあるのだからかと思つたものである」（「種子島から来た男」より）。戦後は共産党の南大阪地区委員会の常任、地区委員長となり、49年には産別会議・全日本

金属労働組合中央支部の書記局長、さらには大金属関係西地方協議会担当オルグとなる。ご本人にとつては「生涯を通じてもつとも充実した活動の時期であった」という。若き日に夢見た「工場群に残らず赤旗が立つ」ことを目指してきたのである。ところが、50年には占領軍による党弾圧、レッドパージがあり、さらに党そのものが分裂して原さんは国際派の一員として活動する。55年の共産党六全協を経て党に復帰し、北地区委員長に、

58年の7回大会で中央委員候補に選出される。

統社同への参加と離脱

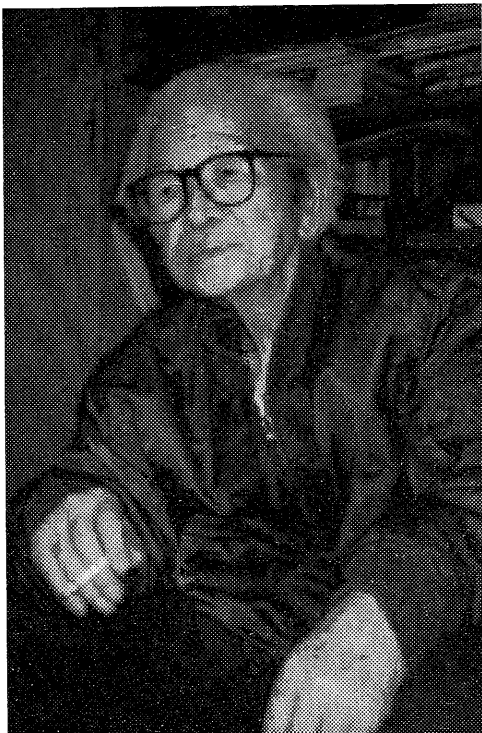
共産党8回大会を前に原さんを含む7人の中央委員・候補が離党し、社会主義革新会議を結成する(61年10月、春日議長、山六・西川副議長、内藤事務局長)。ところが、3カ月足らずでこの体制も崩壊、62年5月に統一社会主義同盟が結成され、春日、山六、原の3氏は統社同に結集。山六さんの遺稿集にそ

のあたりの経緯が座談会で話されている。

原さんによれば「東京勢の口の達者な連中と実践主義の大阪勢の論議が、はてしもなく続いて」とあり、安東仁兵衛さんは「社革の人たちに日本共産党に対する正統主義というのがあった」「構造改革というものについての理解が違っていた」と述べている。さらに、世代的あるいは人間関係的な要素も強かったようだ。つまり東京の安東仁兵衛、大阪の大森誠人、兵庫の直原弘道、京都の榎並公雄ら同世代の横のつながりが深く、当時も「三十代戦線」という言葉を使っていたらしい。

10月7日、9日、社会主義革新会議の総会があり、全国の綱領反対派有志約3000人が東京に集合。会員は3000人に及んだという。しかし、会議は紛糾を極めた。これまでの共産党内での鬱積した不満が一斉に爆

発。この3年にわたる十数回の中央委員会総会の一切が密室で行なわれ、外に漏らさうものならただちに査問委員会にかけて処分が下される。「これまでの日本共産党の腐蝕、墮落した体質を一掃するために、根底から鋤返して一新しなければならぬ」という春日さんの主張に多くの人たちは共感したが、それでは次に何をしていくかとなると途端に甲論乙駁という状況になった。



社同を立ち上げる。社革発足時に3000人いたメンバーはやがて半減し、統社同結成時には数百人規模になっていた。とくに統社同の場合、教員や自治労働の幹部・活動家が主体だったが、30歳代のインテリ層が中核で、原さんの回想では「春日や山六などは古い思考だとされ、うとんじられる状態であった」という。

参加。

ところが、66年11月に組織統一の全国大会で、志賀さんが「さる筋からの情報を感得するところによって、この組織から手を引く」と言って、大会場から退場。ソ連筋からの示唆だろうと言われている。一同は呆然となったが、67年2月にあらためて結党大会を開き、共産主義労働者党が生まれた(内藤知周議長、飯田も書記長)。だが、時代の激闘のなかで急進グループとは袂を分かち、69年7月、大阪で共党内の反対派を集めて、労働者党全国連絡会議(翌年2月に全国協議会)を結成。

64年5月、衆議院で部分核停止条約が上程され、共産党は反対を党議としたが、志賀義雄議員が賛成票を投じて共産党を除名される。参議院でも鈴木市蔵参議院議員が同調して除名となり、この両氏を中心に日本のこえ同志会が結成された。65年3月、こえと社革の呼びかけで、来る参議院選挙に神山茂夫さんを候補に立てることを決定。選挙には惨敗したが、この過程で大同団結が言われ、春日、山六、原も会議や話し合いにしばしば

以上が原全五という人物の政治的足跡だが、社革→統社同→共労党という政治選択についての詳細は著作を読んでもよくわからない。最近、かつて構革系

進取の精神と可能性の追求?

ただ原さんの著作を読んで感じいったのは、そのときどきでの創意工夫と知識欲だ。監獄では差し入れられる本を片っ端から読み漁った。工場労働でも作業工程を工夫して技能を向上させた。戦後の食糧難の時期には炭焼きや鍛冶屋などなんでもかんでもやって凌いだ。80年代はじめの頃かと思うが、小寺山さんが唐突に「原さんは相変わらず気が若い」と言う。聞いてみると「トフラーの第三の波について滔々と語っていた」らしい。それくらい、歳はとつても新しい理論や学説には心惹かれる人だったとも思う。その小寺山さ

んの評は「万年青年」だった。原さんとは面識はあったが、それほど親しくしたわけではない。自分の父親より年上の人だからどうしても遠慮が先になる。いま思えばもう少し話を聞いておくべきだったと思うが、あの当時はこちらもそんな余裕はなかったなとも思うのである。

※写真は、ネットに掲載された巢張秀夫さん(原さんの後輩で、全金の元役員)の追悼文から拝借した